

# 運命論者

国木田独歩

青空文庫



秋の中なかばすぎ過すぎ、冬近くなると何れの海浜かいひんを問とわず、大方は淋れさびて来る、鎌倉かまくらも其通りそのとおりで、自分のように年中住んで居る者いの外ほかは、浜へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網じびきあみの男あるい、或は浜づたいに往通ゆきかよう行商あきんどを見るばかり、都人士とじんしらしい者の姿を見るのは稀まれなのである。

或日あるひ自分いつもは何時いつものようなに滑川なめりがわの辺ほとりまで散歩して、さて砂山すふもとに登ると、思おもいの外おも、北風が身に沁しむので直ぐ麓すふもとに下おりて其処そこら日あたりの可よい所からだ、身体からだを伸のびして楽ほんに書よの読よめみそまうな所あたりと四辺あを見廻みまわ

したが、思うようなところがないので、彼方あちら此方こちらと探し歩いた、すると一個所、面白い場所をみつ発見けた。

砂山が急に崩ほげて草の根でわずかにそれを支さえ、其下そのしたが崖がけのようになつて居いる、其根方ねかたに座つて両足を投げ出すと、背は後うしろの砂山にもた靠れ、右の臂ひじは傍らの小高いところに懸かり、恰度ちやうどソハに倚よつたようまことで、真まことに心持こころの佳よい場ば処しよである。

自分もつは持もつて来た小説ふところを懐ふところから出して心長閑のどかに読んで居ると、日は暖あたたかに照り空は高く晴れ此ここ処こよりは海も見えず、人声も聞えず、なぎさ汀なぎさに転ころがる波音なぎさの穏なかに重々しく聞える外ほかは四圍あたり寂ひつそり然しとして居るので、何時いつしか心こころを全すつかり然ほん書籍ほんに取とられて了しまつた。

しかる然しかるにふと物音ものねの為ためたようであるから何心なく頭を上げると、自

分どこから四五間離れた処ところに人が立て居たのである。何時此処へ来て、何処から現われたのか少すこしも気がつかなかったので、恰あだかも地の底から湧出たかのように思われ、自分は驚いて能く見ると年輩としは三十ばかり、面長おもながの鼻の高い男、背はすらりとした腰形やさがた、衣装みなりといい品といい、一見して別荘に来て居る人か、それとも旅宿やどを取つて滞留して居る紳士と知れた。

彼は其処そこにつつ立つて自分の方を凝じつと見て居る其眼そのめつきを見て自分は更に驚き且つ怪しんだ。敵かたきを見る怒いかりの眼か、それにしては力薄し。人を疑う猜忌さいぎの眼か、それにしては光鈍し。たゞ何心なく他ながむを眺る眼なまむにしては甚はなはだ凄味すこみを帯ぶ。

妙な奴やつだと自分も見返して居ること暫しばし、彼は忽たちまち眼を砂の上

に転じて、一步一步、静かに歩きだした。されども此窪地の外に出ようとは仕ないで、たゞ其処らをブラブラ歩いて居る、そして時々凄<sup>すご</sup>い眼で自分の方を見る、一たいの様子が尋常でないので、自分は心持が悪くなり、場所を<sup>つもり</sup>積で其処を起<sup>た</sup>ち、砂山の上まで来て、後<sup>うしろ</sup>を顧<sup>み</sup>ると、如何<sup>どう</sup>だろう怪<sup>あやし</sup>の男は早くも自分の座<sup>は</sup>つて居た場処<sup>から</sup>に身体<sup>からだ</sup>を投<sup>な</sup>げて居た！ そして自分を見送<sup>は</sup>つて居る筈<sup>はず</sup>が、そうでなく立<sup>た</sup>た膝<sup>ひざ</sup>の上に腕組<sup>うでぐみ</sup>をして突<sup>つ</sup>伏<sup>つ</sup>して顔<sup>かほ</sup>を腕<sup>うで</sup>の間に埋<sup>う</sup>めて居た。

余りの不思議さに自分は様子を見てやる気になつて、兎<sup>と</sup>ある小<sup>こ</sup>蔭<sup>かげ</sup>に枯草<sup>か</sup>を敷<sup>か</sup>いて這<sup>は</sup>いつくばい、書<sup>ほん</sup>を見ながら、折々頭<sup>あたま</sup>を挙<sup>あ</sup>げて彼の男<sup>おとこ</sup>を覗<sup>のぞ</sup>つて居た。

彼はやゝ暫く顔を上なかつた。けれども十分とは自分を待さなかつた、彼の起あがるや病人の如く、何となく力なげであつたが、起つたと思うと其儘くるりと後向になつて、砂山の岨に面と向き、右の手で其麓を掘りはじめた。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を払い、更に小な洋盃様のものを出して、罎の栓を抜や、一盃一盃、三四杯続けさまに飲んだが、罎を静かに下に置き、手に杯を持たまゝ、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ転じたと思ふと、洋杯を手にしたまゝ、自分の方へ大股で歩いて来る、其歩武の気力ある様は以前の様子と全然違つて居た。

自分は驚いて逃げ出そうかと思つた。然し直ぐ思い返して其まゝ横になつて居ると、彼は間もなく自分の傍まで来て、怪げな笑味を浮べながら

「貴様あなたは僕が今何を為たか見て居たでしょう？」  
と言つた声は少し噁しわがれて居た。

「見て居ました。」と自分は判然はつきり答えた。

「貴様は他人の秘密を覗うかがつて可いと思ひますか。」と彼は益ますます怪ますますげな笑味えみを深くする。

「可いとは思ひません。」

「それなら何故僕の秘密を覗うかがいました。」

「僕は此処ここで書籍ほんを読むの自由もつを持て居ます。」

「それは別問題です。」と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

「別問題ではありません。貴様が何にを為ようと僕が何を為ようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴様に秘密があるなら自から先ず秘密に為たら可いでしょう。」

彼は急にそわ／＼して左の手で頭の毛を揉るように搔きながら、「そうです、そうです。けれども彼れが僕の做し得るかぎりの秘密なんです。」と言って暫らく言葉を途切し、気を塞めて居たが、「僕が貴様を責めたのは悪う御座いました、けれども何乎今御覽になつたことを秘密に仕して下さいませんかお願いですが。」

「お頼とあれば秘密にします。別に僕の関したことはありません。」

んから。」

「難ありがと有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ真まことに失礼しましたいきなり匆いきなり卒とが貴様を詰とがめまして……」と彼は人をおし圧つけようとする最初の氣勢とは打うって変り、如何いかにも力なげに詫わびたのを見て、自分も氣の毒になり、

「何もそう謝るには及びません、僕も実は貴様が先刻僕の前に佇つ立つたって僕ばかり見て居いた時の風が何なんとなく怪あやしかったから、それで此ここ処へ来て貴様あなたの為することを覗うかごうて居たのです。矢張やはり貴様を覗うかがったのです。けれども彼の事あが貴様の秘密とあれば、堅く僕は其その秘密を守りますから御安心なさい。」

彼は黙って自分の顔を見て居たが、

「貴様は必定守きつとつて下さる方です。」と声をふるわし、

「如何どうでしょう、一つ僕の杯さかずきを受けて下さいませんか。」

「酒ですか、酒なら僕は飲のまないほうが可よいのです。」

「飲のまないほうが！ 飲のまないほうが！ 無論そうです。もう飲

まないで済すむことなら僕とても飲のまないほうが可よいのです。けれ

ども僕は飲のむのです。それが僕の秘密ひみつなんです。如何どうでしょう、僕

と貴様あなたと斯こうやって話をするのも何かの運命あやしです、怪あやしい運命あやしですか

ら、不思議な縁ゆかりですから一つ僕の秘密ひみつの杯さかずきを受けて下さいませんか、え、如何どうでしょう、受けて下さいませんか。」という言葉の

節々そのこわね、其声音そのこわね、其眼元そのこわね、其顔色そのこわねは実げに大おおなる秘密ひみつ、痛いたましい秘密ひみつを

包いんで居いるように思おもわれた。

「よろしゅう御座います、それでは一つ戴いたきましよう。」と自分の答こたうるや直すぐ彼は先まに立たつて元の場ば処しょへと引返ひえすので、自分も其あと後に従したがつた。

## 二

「これは上等のブランデーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の亀屋かめやへ行いつて最上のを呉くれろと内証ないしようで三本みつ買かつて来て此処ここへ匿かくして置おいたので、一本は最早もうたいらげて空罎あきびんは滑なめりがわわ川がわに投なげ込こみました。これが二本目です、未だま一本この砂の中に埋うめずてあります、無くなれば又買かつて来きます。」

自分は彼の差した杯さかずきを受け、少すこしずつ啜すすりながら彼の言う処ところを聞きて居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益ますまたかま々々高たかるを禁こじ得えなかつた。けれども決して彼の秘密に立たち入いうとは思おもなかつた。  
 「それで先刻僕が此処ここへ来て見ると、意外にも貴様あなたが既に此場この処を占領して居たのです、驚おどきましたね、怪けしからん人もあるものだ僕の酒庫を犯し、僕の酒宴むしろの筵むしろを奪さらいながら平気で書籍ほんを読よんで居るなんてと、僕はそれで貴様を見つめながら此処を去いらなかつたのです。」と彼は微笑して言いつた、其眼元そのめもとには心の底ひそに潜ひそんで居る彼の優やさしい、正直な人柄の光あげ髪ほのめ髯ひげいて、自分には更さらに其それが惨いたましげに見みえた、其処そこで自分も笑わらいを含こみ、  
 「そうでしよう、それでなければあんな眼つきで僕を御覧になる

訳は御座いません。さも恨めしそうでした。」

「イヤ恨めしくは御座いません、情なかつたのです。オヤ／＼乃公は隠して置いた酒さえも何時か他人の尻の下に敷れて了うのか、と自分の運命を詛つたのです。詛うと言えば凄く聞えますが、実は僕にはそんな凄<sup>すご</sup>い了<sup>りようけん</sup>見<sup>ま</sup>も亦た氣力もありません。運命が僕を詛うて居るので——貴様<sup>あなた</sup>は運命ということを信じますか？え、運命ということ。如何<sup>どう</sup>です、も一<sup>ひとつ</sup>」と彼は鑿<sup>びん</sup>を上げたので「イヤ僕は最早<sup>もゆただき</sup>戴<sup>ただ</sup>ますまい。」と杯<sup>さかずき</sup>を彼に返し「僕は運命論者ではありません。」

彼は手酌<sup>てしやく</sup>で飲み、酒気を吐いて、

「それでは偶然論者ですか。」

「原因結果の理法を信ずるばかりです。」

「けれども其<sup>その</sup>原因は人間の力より発し、そして其結果が人間の頭上に落ち来るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が沢山ある。その時、貴様は運命という人間の力以上の者を感じませんか。」

「感じます、けれども其<sup>それ</sup>は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命という如き神秘<sup>こゝと</sup>らしい名目を其<sup>その</sup>力に加えることは出来ません。」

「そうですか、そうですか、解<sup>わか</sup>りました。それでは貴様<sup>あなた</sup>は宇宙に神秘なしと言うお考<sup>かんがえ</sup>なのです、要<sup>つまり</sup>之、貴様には此<sup>この</sup>宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明<sup>めい</sup>亮<sup>りやう</sup>なので、貴様の頭は二<sup>に</sup>々<sup>にん</sup>が四<sup>し</sup>で、

一切いっせつが間に合うのです。貴様の宇宙は立体でなく平面です。無窮無限という事実も貴様には何等なんら、感興と畏懼いよくと沈思とを喚び起す当面の大いなる事実ではなく、数の連続を以てインフイニティー（無限）を式で示そうとする数学者のお仲間でしょう。」と言つて苦しそうな嘆息を洩し、冷かな、嘲あざけるような語気で、

「けれども、実は其方が幸福なのです。僕の言葉で言えば貴様は運命に祝福されて居る方、貴様の言葉で言えば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です。」

「それでは此これで失礼します。」と自分は起上たちあがつた、すると彼は狼狽あわてて自分を引止め、「ま、ま、貴様怒つたのですか。若し僕もの言つた事がお気に触つたら御勘弁を願います。つい其その自分で勝

手にくるし苦んで勝手に色々なことを、馬鹿な訳にも立たん事を考かんがえ  
 て居おるもんですから、つい見境もなく饒しゃべる舌ののです。否いいえ、誰だれにも  
 斯そんなことを言つた事はないのです。けれども何んだか貴様あなたには  
 言つて見とう感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、  
 貴様には笑われるかも知れませんが。僕にはやはり怪あやしの運命が  
 僕と貴様を引ひきつけ着たように感ぜられるのです。不ふしあわ幸せな男と思  
 つて、もすこしお話し下さいませんか、もすこし……」

「けれども別にお話しするようなことも僕には有りませんが……」

「そう言わないで何卒どうかもすこし此処ここに居いて下さいな、もすこし……」

……。噫あゝ！ 如何どうして斯こう僕は無理ばかり言うのでしよう！ 醉よつた  
 のでしようか。運命です、運命です、可よう御座います、貴様にお

話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聴きて下さい、僕ふしあわせの不幸な運命を！」

此この苦痛さげびの叫なげを聞いて何なんびと人か心を動かさざらん。自分は其そのまぎま儘止とつて、

「聞ききましたようにとも。僕が聴きいてお差さしつか支つかえがなければ何事でも承うけたまわりましたよう。」

「聴きいて下さいますか。それならお話しましょう。けれども僕の運命の怪まじしき力ちからに惑まどうて居ゐる者ものですから、其積つもりで聴きいて下さい。若もし原因結果げんいんけつの理法りぽうと貴様あなたが言うならそれでも可よう御座ごいます。たゞ其原因結果げんいんけつの発展はつ展てんが余あまりに人意にの外そとに出でて居ゐて、其為ために一人ひとりの若い男おとこが無む限げんの苦惱くなうに沈しづんで居ゐる事実じつじを貴様あなたが知しりましたなら、

それを僕が怪しき運命の力と思うのも無理の無いことだけは承知下さるだろうと思います、で貴様に聞きますが此処ここに一人の男があつて、其男が何心なく途みちを歩いて居ると、何処どこからとも知れず一ひとつの石が飛んで来て其男の頭に命あた中り、即死する、そのために其男の妻子は餓うえに沈み、其為めに母と子は争い、其為に親子は血を流す程の惨劇を演ずるといふ事実が、此世に有り得ることと貴様あなたは信ずるでしょうか。」

「實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることとは信じます、それは。」

「そうでしょう、それなら貴様は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲惨がやゝもすれば、人の頭上

に落ちてくるといふ事実を認したたむるのです、僕の身の上ごとの如ごとき、全またく其それなので、殆ほとんど信べず可べからざる怪あやしい運命が僕もてあを弄もんで居いるのです。僕は運命と言いいます。僕にはそほかう外ほかには信まじられんですから。」と言いつて彼はは吻ほっと嘆ためい息きを吐つき、

「けれども貴様聴きいて呉くれますか。」

「聴ききますとも！ 何卒どうかお話わなさい。」

「それなら先まず手近てぢかな酒さけのことから話わしましょう。貴様は定めし不思議なことと思おもつて居いるでしょうが、実は世間よこしまに有ありふれたことことで、苦くる悩しみを忘われたさの魔酔まよ剤ざいに用もちいて居おるのです。砂すなの中に隠かくして置くのは隠かくして飲のまなければならぬ宅たくの事情じやうけいがあるからなので、その上かみ、此場この所ところは如い何かにも静しずで且かつ快かい潤かつで、如い何かな

毒々しい運命の魔も身を隠して人を覗うかががう暗い蔭かげのないのが僕の  
 気に入ったからです。此処ここへ身を横たえて酒アルコール 精アルコールの力に身を托たく  
 し高い大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何いくらか自由を得る時です。  
 その中うちには此激烈な酒アルコール 精アルコールが左さなきだに弱はり果た僕の心臓を次  
 第に破つつて、遂つには首尾よく僕も自滅するだろうと思つて居ます  
 。

「そんなら貴様あなたは、自殺を願うて居るのですか。」と自分は驚い  
 て問うた。

「自殺じゃアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないの  
 す。貴様、運命の鬼が最も巧たくみに使う道具の一は『惑まどい』ですよ。

『惑』は悲かなしを苦くるみに変かえます。苦くる悩なを更に自乗まさせます。自殺は決

心です。始終まどい惑のために苦んで居る者に、如何どうして此決心が起りましよう。だから『惑』という鈍い、重々しい苦惱くるしみから脱れるには矢張やはり、自滅という遅鈍ちどんな方法しか策がないのです。」

と沁しみ々しみ言う彼の顔には明あきらかに絶望の影が動いて居た。

「如何どういう理由わけがあるのか知りませんが、僕は他人の自殺を知つて之これを傍観する訳には行きません。自滅というも自殺に違いないのですから。」と自分が言うや、

「けれども自殺は人々の自由でしょう。」と彼は笑味えみを含んで言つた。

「そうかも知れません。然しかし之を止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です。」

「可<sup>よ</sup>う御座います。僕も決して自滅したくは有りません若<sup>も</sup>し貴様<sup>あなた</sup>が僕の物話<sup>はなし</sup>を悉<sup>すつかりきい</sup>皆聴<sup>き</sup>て、其上<sup>そのうえ</sup>で僕を救うの策を立てて下さるのなら僕は此上<sup>このうえ</sup>もない幸福です。」

斯<sup>こ</sup>う聞いては自分も黙<sup>もく</sup>つて居<sup>ゐ</sup>られない、

「可<sup>よ</sup>しい！ 何卒<sup>どう</sup>か悉<sup>すつかり</sup>皆聴<sup>き</sup>かして貰<sup>もら</sup>いましょう。今度は僕の方<sup>かた</sup>からお願<sup>ねが</sup>します。」

### 三

「僕は高<sup>たか</sup>橋<sup>はし</sup>信<sup>しん</sup>造<sup>ぞう</sup>という姓名<sup>せいめい</sup>ですが、高橋<sup>たかはし</sup>の姓<sup>せい</sup>は養家<sup>やうか</sup>のを冒<sup>おか</sup>したので、僕の元<sup>もと</sup>の姓<sup>せい</sup>は大塚<sup>おおつか</sup>というです。」

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚剛蔵ごうぞうと  
 言つて御存知でも御座ございますか、東京控訴院の判事としては一ちよつ  
 寸と世間でも名の知れた男で、剛蔵の名の示す如くごと、剛直一いっぺん端  
 の人物。随分僕を教育する上には苦心したようでした。けれども  
 如何どういうものか僕は小児こどもの時分から学問が嫌いきらいで、たゞ物陰ものかげに  
 一人引込んで、何を考かんがえるともなく茫然ぼんやりして居ることが何よ  
 り好すきでした。十二歳の時分と覚えて居ます、頃は春の末すえというこ  
 とは庭の桜ほとんが殆ど散り尽して、色褪いろあせた花弁はなびらの未だ梢まに残つて  
 居いたのが、若葉ひまの際からホロ／＼と一ひとひら片三片落つる様さまを今も判  
 つきり然おもと想い出すことが出来るので知れます。僕は土蔵くらの石段に腰  
 かけて例いつもの如く茫然ぼんやりと庭おもての面を眺めて居ますと、夕日が斜に庭

の木の間に射し込で、さなきだに静かな庭が、一増肅然して、  
 凝然として、眺めて居ると少年心にも哀いような楽しいような、  
 所謂春愁でしょう、そんな心持になりました。

人の心の不思議を知つて居るものは、童児の胸にも春の静な夕  
 を感ずることの、實際有り得ることを否まぬだろうと思ひます。

兎も角も僕はそういう少年でした。父の剛蔵はこのことを大變  
 苦にして、僕のことを坊頭臭い子だと数々小言を言い、僧侶  
 なら寺へ与て了うなど怒鳴つたこともありませう。それに引かえ僕  
 の弟の秀輔は腕白小僧で、僕より二ツ年齢が下でしたが骨格も  
 父に肖て逞ましく、氣象もまるで僕とは變つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見て居たもので

す。母というはお豊とよといい、言葉の少ない、柔和らしく見えて確しつかり固つかりした気象の女でしたが、僕を叱しかつたこともなく、さりとして甘やかす程に可愛かわいがりもせず、言わば寄らず触らずにして居たようです。

それで僕の気象が性来今言つたようなのであるか、或あるはそうでなく、僕は小児こどもの時、早く不自然な境おほかに置おかれて、我知らずの孤独な生活を送つた故ゆえかも知れないのです。

成程父は僕のことを苦にしました。けれども其その心配はたゞ普通の親が其子の上うわらうを憂うれうのは異ちがつて居たのです、それで父が『折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のような男は育て甲斐ががない』と愚痴めいた小言を言う、其言葉の中にも僕の怪しい運命の

穂先が見えて居たのですが、少年こどもの僕には未だま気が着きませんでした。

言うことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家いっけは岡山の市中に住んで居たので、一家が東京に移ったのは未だ余程後のことです。

或日あるひのことでした、僕が平時いつものように庭へ出て松の根に腰をか  
け茫然ぼんやりして居ると、何時いつの間にか父が傍そばに来て、

『お前は何を考がえて居るのだ。持もつて生れた気象なら致方しかたもないが、乃父おれはお前のような気象は大嫌だいきらだ、最少もすこし確固しつかりしろ。』  
と真面目まじめの顔で言いますから、僕は顔も上げ得ないで黙って居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

『オイ信造』と言つて急に声を潜め『お前は誰かに何か聞は為なかつたか。』

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顔を仰ぎましたが、不思議にも我知らず涙含みました。それを見て父の顔色は俄に変わり、益々声を潜めて、

『慝すには及ばんぞ、聞たら聞いたと言うが可え。そんなら乃父には考案があるから。サア慝くさずに言うが可え。何か聞いたろう?』

此時このときの父の様子は余程狼狽ろうばいして居るようでした。それで声さえ平時いつもと変わり、僕は可怕こわくなりましたから、しく／＼泣き出すと、父は益々狼狽ろうたえ、

『サア言え！ 聞いたら聞たと言え！ 慥すかお前は』と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり、

『御免なさい、御免なさい』とたゞ謝罪りました。

『謝罪れと言うんじゃない。若し何かお前が妙なことを聞いて、それで茫然考がえて居るんじゃないかと思うから、それで訊くのだ。何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言え！』と今度は眞実に怒つて言いますから、僕は何のことも解らず、たゞ非常な悪いことでも仕たのかと、おろく声で、

『御免なさい、御免なさい。』

『馬鹿！ 大馬鹿者！ 誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く。』

怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熟と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、『泣んでも可え、最早乃父も問わんから、サア奥へ帰るが可え、』と優しく言つた其言葉は少ないが、慈愛に満て居たのです。

其後でした、父が僕のことを余り言わなくなつたのは。けれども又其後でした僕の心の底に一片の雲影の沈んだのは。運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは実に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の小供なら間もなく忘れて了つただろうと思ひますが、僕は忘れる処か、間がな隙がな、何故父は彼のような事を問うたのか、父が斯くまでに狼狽した処を見ると、余程の大事であろうと、少年心

に色々と考えて、そして其大事は僕の身の上に関するのだと信ずるようになりました。

何故なげでしょう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問うたことが僕の身の上のことと自分で信ずるに至つたでしょう。

暗黒くらきに住みなれたものは、能く暗黒くらきに物を見ると同じ事で、不自然なる境おかに置れたる少年は何時いつしか其暗そのき不自然の底ひそに蔭ひそんで居る黒点を認めることが出来たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒点の真相とらを捉え得たのはずっと後のことです。僕は気にかかりながらも、これを父に問い返すことは出来ず、又母には猶なお更さらら出来ず、小ちいな心こころを痛めながらも月日を送つて居まし

た。そして十五の歳としに中学校の寄宿舎に入れられました。其前に一ツお話して置く事があるのです。

大塚の隣屋敷に広い桑畑くわばたけがあつて其横に板葺そぎふきの小さな家ちいさが

ある、それに老としより人夫婦と其ころ十六七になる娘が住すんで居ました。

以前は立派な士族で、桑園くわばたけは則ち其屋敷跡だそうです。此老このと

人しよりが僕の仲善なかよしでしたが、或日あるひ僕に囲碁あそびの遊戯あそびを教くえて呉くれま

した。二三日たつ経て夜食の時、このことを父母に話こしました処ところ、何

時つも遊戯あそびのことは余り気にしない父が眼めに角かどを立て叱しかり、母すら

驚おどいた眼を張はつて僕の顔を見つめました。そして父母が顔を見合

わした時の様子の尋常でなかつたので、僕は甚はなはだ妙なに感じました。

何故なぜ僕が囲碁あそびを敵なとしなければならぬか、それも後に解わかりました。

たが、其それが解つた時こそ、僕が全く運命の鬼に圧倒せられ、僕が今の苦悩を嘗なめ尽す初はじめで御座いました。

## 四

僕の十六の時、父は東京に転任したので大塚一家いっけは父と共に移転しましたが、僕だけは岡山中学校の寄宿舎に残されました。

僕は其後そのご三年間の生活を思うと、僕の此世このよに於ける真まの生活は唯ただ彼の学校時代だけであつたのを知ります。

学生は皆な僕に親切でした。僕は心の自由を恢かい復ふくし、悪運の手より脱のがれ、身の上の疑惑を懐いだくこと次第に薄くなり、沈ちん鬱うつの

気象までが何時いつしか雪の融とける如ごとく消えて、快かい潤かつな青年の気を帯びて来ました。

然しかるに十八の秋、突然東京の父から手紙が来て僕に上京を命じたのです。穏おだやかな僕の心は急に擾かきみだ乱だされ、僕は殆ほとんど父の真意を知るに苦しみ、返書を出して責めて今年、卒業の日まで此儘このままに仕て置いて貰もらおうかと思いましたが、思い返して直ぐ上京しました。麴こうじまち町の宅に着くや、父は一室ひとまに僕を喚よんで、『早速さつそくだがお前と能よく相談したいことが有るのだ。お前これから法律を学ぶ気はないかね。』

思いもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたきり容易に口を開くことが出来ない。

『実は手紙で詳しく言つてやろうかとも思つたが、廻りくどいから喚よんだのだ。お前も卒業までと思つたろうし、又大学までも志こころざしして居いたろうけれど、人は一日も早く独立の生活を営えむ方が可ええことはお前も知つて居るだろう。それでお前これから直すぐ私立の法律学校に入るのじゃ。三年で卒業する。弁護士の試験を受けあかつきる。そして暁あかつきは私と懇意な弁護士の事務所そこに世話してやるから、其そこ処で四五年も実地の勉強をするのじゃ。其そのうち内に独立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂々たる紳士となることが出来る。如何どうじゃな、其方が近道じゃぞ。』

という父の言葉を聴きいて居る、僕の心の全く顛てんどう動したのも無理はないでしょう。

これ実に他人の言葉です。他人の親切です。居候いそうろうの書生に主人の先生が示す恩愛です。

大塚剛蔵は何時しか其自然に返つて居たのです。知らずく其自然を暴露しめすに至つたのです。僕を外そとに置くこと三年、其その実子なる秀輔ひですけのみを傍かたわらに愛撫あいぶすること三年、人間が其天真に帰るべき門、墳墓ちかづに近くこと三年、此この三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれども彼は未だ其自然を自認ますることが出来ず、何ど処こまでも自分を以前の父の如ごとく、僕を以前の子の如く見ようとして居るのです。

其そこ処こで僕は最早進んで僕の希望のぞみを述のべるどころではありません。たゞこれ命めいこれ従したがうだけのことを手短かに答えて父の部屋を出

てしまいました。

父ばかりでなく母の様子も一変して居たのです。日の経つに従  
 ごとく僕は僕の身の上に一大秘密のあることを益々信ずるよう  
 になり、父母の挙動に気をつければつけるほど疑惑の増すばかり  
 なのです。

一度は僕も自分の癖見だろうかと思いましたが、合憎と想  
 起すは十二の時、庭で父から問いつめられた事で、彼を想い、  
 これを思えば、最早自分の身の秘密を疑がうことは出来ないの  
 です。

懊悩の中に神田の法律学校に通つて三月も経ましたらうか。

僕は今日こそ父に向い、断然此方から言い出して秘密の有無を訊

そうと決心し、学校から日の暮方に帰って夜食を済ますや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、『何ぞ用か』と問い、やはり筆を執て居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に座つて、暫く黙つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨て来たと見え、廂を打つ霰の音がパラ／＼聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、

『何ぞ用でもあるか、』と優しく問いました。

『少し訊ねたいことが有りますので、』と僅かに口を切るや、父は早くも様子を見て取つたか

『何じゃ。』と厳かに膝を進めました。

『父様、私は真実に父様の兎なのでしょうか。』と兼て思い定

めて置いた通り、単刀直入に問いました。

『何じやと』と父の一言、其その眼光の鋭さ！ けれども直すぐ父は顔をやわらちを柔なげて、

『何故なぜお前はそんなことを私に聞くのじや、何か私共わしがお前に親らしくないことでもして、それでそういうのか。』

『そういう訳では御座いませんですが、私には昔から如何どういう者か此この疑うたがいがあるので、始終胸を痛めて居おるので御座ます、知らして益のない秘密だから父おとうさま上も黙もつてお居おでになるのでしようけれど、私は是非それが知りたいので御座います。』と僕は静しずかに、決然けつぜんと言いい放はなちました。

父は暫時しばらく腕組うでぐみをして考えて居おましたが、徐おもむろに顔を上げて、

『お前が疑がつて居ることも私は知つて居たのじや。私の方から言うた方がと思つたことも此頃ある。それで最早お前から聞かれて見ると猶お言うて了うが可えから言うことに仕よう。』とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけなのです。周防山口の地方裁判所に父が奉職して居た時分、馬場金之助ばばきんのすけという碁客ごかくが居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往来して居たそうです。その馬場という人物は一種非凡な処ところがあつて、碁以外に父は其人物を尊敬して居たということです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出来ないものと諦らめ

て居ると、馬場が病で没し、其妻も間もなく夫の後を襲て此世を去り、残ったのは二歳になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の児とし養つたので、父からいうと半分は孤児を救う義侠でしたろう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたそうです。けれども母の籍が未だ馬場の籍に入らん内に僕が生まれ、其為でしょう、僕の出産届が未だ仕てなかつたので、大塚の父は僕を引取るや直に自分の子として届けたのだそうです。

以上の事を話して大塚の父のいうには、

『其後私は間もなく山口を去つたから、お前を私の実子でないとするものは多くないのじゃ。私達夫婦は飽くまで実子の積でこれ

まで育てて来たのじゃ。この先も同じことだからお前も決して癪ひがみこんじょう根生を起さず、何処どこまでも私達を父母と思つて老先おいさきを見届けて呉れ。秀輔ひですけは実子じゃがお前のことは決して知らさんから、お前も真実の兄となつて生涯あ彼れの力ともなつて呉れ。』と、老おいの眼めに涙を見るより先に僕は最早もつ泣いて居たのです。

其処そこで養父と僕とは此等これらの秘密を飽あくまで人に洩もらさぬ約束をし、又た僕まが此先この何かの用事で山口にゆくとも、たゞ他所よそながら父母の墓もつに詣もつで、決して公けにはせぬということを僕は養父に約あしました。

其後そのごの月日は以前よりも却かえつて穏おだやかに過すぎたのです。養父も秘密を明けて却かえつて安心した様子、僕も養父母の高恩を思うにつけて、

心を傾けて敬愛するようになり、勉学をも励むようになりました。そして一日も早く独立の生活を営み得るようになり、自分は大塚の家から別れ、義弟の秀輔に家督かとくを譲りたいものと深く心に決する処ところがあつたのです。

三年の月日は忽ちたちま逝ゆき、僕は首尾よく学校を卒業しましたが、猶なお養父の言葉に従い、一年間更に勉強して、さて弁護士べんしゆの試験を受けましたところ。意外の上首尾、養父も大よろこびで早速其友なる井上博士の法律事務所に周旋しゆうせんして呉くれました。

兎も角も一人前ひとまへの弁護士となつて日々京橋区なる事務所に通いうて居いましたが、若し彼あのまゝで今日になつたら、養父も其目的通りに僕を始末し、僕も平穩な月日を送つて益々ますます前途の幸福

を<sup>たのし</sup>楽しんで居たでしよう。

けれども、僕は如何<sup>どう</sup>しても悪運の児<sup>こ</sup>であつたのです。殆ど<sup>ほとん</sup>何<sup>なんび</sup>とも想像することの出来ない 陥<sup>おとしあな</sup> 穽<sup>な</sup>が僕の前に出来て居て、悪運の鬼は惨<sup>ざん</sup>刻<sup>こく</sup>にも僕を突き落しました。

## 五

井上博士は横浜にも一ヶ所事務所を持<sup>もっ</sup>て居ましたが、僕は二十五の春、此<sup>この</sup>事務所に詰めることとなり、名は井上の部下であつても其<sup>その</sup>実は僕が独立でやるのと同じことでした。年<sup>とし</sup>齡の割合には早い立身<sup>い</sup>と云<sup>い</sup>つても可<sup>よ</sup>いだろうと思ひます。

ところ

処が横浜に高橋という雑貨商があつて、随分盛大にやつて居ましたが、其主人は女で名は梅、所天は二三年前に亡なつて一人娘の里子というを相手に、先ず贅沢な暮を仕て居たのです。

訴訟用から僕は此家に入出入することとなり、僕と里子は恋仲になりました、手短に言いますが、半年経ぬうちに二人は離れることの出来ないほど、逆せ上げたのです。

そして其結果は井上博士が媒酌となり、遂に僕は大塚の家を隠居し高橋の養子となりました。

僕の口から言うも変ですが、里子は美人というほどでなくとも随分人目を引く程の容色で、丸顔の愛嬌のある女です。そして遠慮なくいまするが全く僕を愛して呉れます、けれども此愛

は却<sup>かえ</sup>つて今では僕を苦しめる一大要素になつて居るので、若<sup>も</sup>し里子が斯<sup>か</sup>くまでに僕を愛し、僕が又た斯<sup>こ</sup>うまで里子を愛しないならば、僕はこれほどまでに苦しみは仕ないのです。

養母の梅は今五十歳ですが、見た<sup>ところ</sup>処、四十位にしか見えず、小柄の女で美人の相を<sup>そな</sup>へ、なか／＼立派な婦人です。そして情<sup>はげ</sup>烈しい正直な人柄といえ、智<sup>ちえ</sup>慧の方はやゝ薄いということは直<sup>す</sup>ぐ解<sup>わか</sup>るでしょう。快活で能<sup>よ</sup>く笑<sup>よ</sup>い能<sup>よ</sup>く語<sup>よ</sup>りますが、如<sup>どう</sup>何かすると恐<sup>おそ</sup>しい程沈鬱な顔をして、半日何<sup>なんびと</sup>人とも口を交<sup>まじ</sup>えないことがあります。僕は養子とならぬ以前から此<sup>この</sup>人柄に氣をつけて居<sup>い</sup>ましたが、里子と結婚して高橋<sup>うち</sup>の家に寝起することとなりて間もなく、妙なことを発見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了い、不動明王を一心不乱に拝むことで、口に何ごとか念じつゝ床の間にかけた火炎の像の前に礼拝して十時となり十一時となり、時には夜よなかつぎ半過なかすぎに及ぶのです、居間の中うち、沈鬱ふさいで居た晩は殊ことにこれが激しいようでした。

僕も始めは黙つて居ましたが、余り妙なので或日あるひこのことを里子たずに訊ねると、里子は手を振つて声を潜ひそめ、『黙つて居らつしやいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大変気嫌きげんを悪くしますから、成るべく知らん顔して居たほうが可いいんですよ。御覧なさい全然まるで狂気きちがいでしょう。』と別に気にもかけぬ様なので、僕も強しいては問いもしなかつたのです。

けれども其後そのご一月もして或日あるひ、僕は事務所から帰り、夜食を終て雑談して居ると、養母は突然、

『怨おんりよう霊りようというものは何年経ても消えないものだろうか。』と

問いました。すると里子は平気で、

『怨霊なんて有るもんじゃアないわ。』と一言で打消そうとする  
と、母は向むきになつて、

『生意気を言いなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言うのだ。』

『そんなら母おつかさん上は見て?』

『見ましたとも。』

『オヤそう、如何どうな顔をして居て? 私も見たいものだ。』と里

子は何処どこまでも冷かしてかゝった。すると母は凄すごいほど顔色を変えて、

『お前 怨おんりよう 霊りよう が見たいの、怨霊おんりようが見たいの。真実ほんとに生意気なこ  
 というよ此人このひとは！』と言いい放ち、つツと起たつて自分の部屋ひっこに引込  
 了しまった。僕は思おもわず、

『母おつかさん 上どう 如何どうか仕つかて居ゐなさるよ、氣きを附つけんと……』

里子りこは不安ふあんな顔かほをして、

『私ほんと真実ほんとに氣味きみが悪わるいわ。母おつかさん 上どうは必きつ定何きつとにか妙まじなことを思おもつ  
 て居ゐるのですよ。』

『ちつと神経しんけいを痛いためて居ゐなさるようだね。』と僕ぼくも言いいました、  
 さて翌日あしたになると別べつに變かつたことことはないのです。變かつて居ゐるのは

唯々何時もの通り夜になると不動様を拜むことだけで、僕等もこ  
 れは最早見慣れて居るから強て気にもかゝりませんでした。

ところが今歳の五月です、僕は何時よりか二時間も早く事務所を退  
 ちが今歳の五月です、僕は何時よりか二時間も早く事務所を退  
 て家へ帰りますと、其日は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも  
 母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案内も  
 せず襖を開けて中に入ると母は火鉢の傍にぽつねんと座つて居ま  
 したが、僕の顔を見るや、

『ア、ア、アツ、アツ！』と叫んで突起きたかと思うと、又尻  
 餅を舂て熟と僕を見た時の顔色！僕は母が氣絶したのかと喫  
 驚して傍に駈寄りしました。

『如何しました、如何しました』と叫けんだ僕の声を聞いて母は

僅わずかに座り直し、

『お前だったか、私は、私は……』と胸を撫さすつて居ましたが、其間そのいだも不思議そうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚ろいて、

『母おつかさん上如何どうなさいました。』と聞くと、

『お前が出抜だしぬけに入つて来たので、私は誰だれかと思つた。お、喫びつく驚りした。』と直すぐ床を敷しかして休しまんで了しまいました。

此このこと事の有つた後は母の神経に益ますます々異常を起し、不動明王を拝むばかりでなく、僕などは名も知らぬ神符おふだを幾枚となく何処どこからか貰もらつて来て、自分の居間しよしよの所々に貼はりつけたものです。そして更に妙なのは、これまで自分だけで勝手に信じて居たのが、僕を見て驚ろいた後は、僕に向つても不動を信じろというので、僕が

何故<sup>なぜ</sup>信じなければならぬかと聞くと、

『たゞ黙つて信じてお呉<sup>く</sup>れ。それでないと私が心細い。』

『母<sup>おつかさん</sup> 上の気が安まるのなら信仰も仕ましようが、それなら私

よりもお里の方が可<sup>い</sup>いでしょう。』

『お里では不可<sup>いけま</sup>せん。彼<sup>あれ</sup>には関係のないことだから。』

『それでは私には関係があるのですか。』

『まあそんなことを言わないで信仰してお呉<sup>く</sup>れ、後生だから。』

という母の言葉を里子も傍<sup>そば</sup>で聞て居ましたが、呆<sup>あき</sup>れて、

『妙ねえ母<sup>おつかさん</sup> 上、不動様が如何<sup>どう</sup>して母<sup>おつかさん</sup> 上と信造さんには

関係があつて私には無いのでしょうか。』

『だから私が頼むのじやありませんか、理<sup>わけ</sup>由が言われる位なら

頼たのみはしません。』

『だって無理だわ、信造さんに不動様を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを勧すすめたつて……』

『そんなら頼みません！』と母は怒つて了しまったので、僕は言葉を  
柔なげ、

『イヤ私だつて不動様を信じないとは限りません。だから母おつかさ

上んまア其理由そのいわれを話して下さいな。如何どんなことか知りませんが、親

子の間だから少すこしも明あされないうようなことは無いでしょう。』と求

めました。これは母の言う処ところに由よつて迷信を圧おさえ神経を静める方法

もあろうかと思つたからです。すると母は暫しばらく考いえて居いましたが、

吐息といきをして声こゑを潜ひそめ、

『これ限りの話だよ、誰にも知してはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に縁かない前に或男に言い寄られて執着追ひ廻されたのだよ。けれども私は如何しても其男の心に従わなかつたの。そうすると其男が病氣になつて死ぬ間際に大變私を怨んで色々なことを言つたそうです。それで私も可い心持は仕なかつたが、此処へ縁づいてからは別に氣にもせんで暮して居ました。ところが所天が死なつてからというものは、其男の怨靈が如何かすると現われて、可怖い顔をして私を睨み、今にも私を取殺そうとするのです。それで私が不動様を一心に念ずると其怨靈がだん／＼消て無なります。それにね、』と、母は一増声を潜め『この頃は其怨靈が信造に取ついたらしいよ。』

『まあ嫌いやな！』里子は眉まゆを顰ひそめました。

『だってね、如何どうかすると信造の顔が私には怨霊おんりやうそっくりに見えるのよ。』

それで僕に不動様を信じろと勧めるのです。けれども僕にはそんな真似まねは出来ないから、里子と共に色々と怨霊おんりやうなどいうものがあるべきでないことを説いたけれど無益むえきでした。母は堅く信じて疑うたががわないので、僕等も持も余あまし、此この鎌倉へでも来て居て精神を静めたらと、無理に勧めて遂ついに此こ処この別荘いれに入いれたのは今年の五月のことです。」

高橋信造は此処ここまで話して来て忽ち頭たちまかしらをあげ、西に傾く日影を  
愁しゆうぜん然ぜんと見送つて苦惱たに堪えぬ様であつたが、手早く杯さかずきをあげ  
て一杯飲み干し、

「この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事実を露骨に手短  
に話しますから、其それ以上は貴様あなたの推察を願うだけです。

たかはしうめ すなわ高橋梅、則ち僕それの養母は僕あなたの眞実の母、生うみの母であつたので

す。さい さとこ妻の里子は父ことこを異した僕あなたの妹であつたのです。如何どうです、こ  
れが奇あやしい運命でなくて何としましょう。斯かくの如ごときをも原因結果

の理法といえばそれまでです。けれども、かゝる理法の下に知ら  
ずくこのみ此身おかを置れた僕から言えば、此天地間にかゝる惨ざん刻こくなる

理法すら行なわるゝを恨みます。

先まず如何どうして此等これらの事実が僕に知れたか、其手続そのを簡単に言え  
ば、母が鎌倉に来てから一ひと月つき後、僕は訴訟用で長崎にゆくこと  
となり、其途中山口、広島などへ立寄る心組で居いましたから、見  
舞かた／＼鎌倉へ来て母に此事このを話しますと、母は眼めの色を變かえ  
て、山口などへ寄るなど言います。けれども僕の心には生うみの父母  
の墓に参る積つもりがありますから、母には可よい加減に言つて置いて、  
遂ついに山口に寄つたのです。

兼かねて大塚の父から聞いて居たから寺は直すぐ分りました。けれど  
も僕は馬場金之助ばばきのすけの墓のみ見出して、死しんだと聞きいた母の墓を見ない  
ので、不審に思つて老僧に遇あひ、右の事を訊たずねました。尤もつとも唯ただ

所縁ゆかりのものとのみ、僕の身の上は打明けけないのです。

すると老僧は馬場金之助の妻お信のぶの墓のあるべき筈はずはない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某なにがしの弟と怪しい仲間になり、金之助の病気は其そのため為更に重くなつたのを気の毒とも思はず、遂ついに乳飲ちのみこ児を置去りにして駈落かけおちして了しまつたのだと話しました。

老僧は猶なおも父が病中母を罵ののつたこと、死し際に大塚剛蔵に其一子いっしを托したことで語りました。

其お信が高橋梅であるということは、誰だれも知らないのです。僕も証拠は持もつて居いません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が則すなわちそれであることを確信したのです。

僕は山口で直すぐ死んで了すおうかと思ひました。彼あの時、実に彼

の時、僕が思い切きつて自殺して了しまつたら、寧むしろ僕は幸さいわいであつたので  
す。

けれども僕は歸かへつて来きました。一ひとつは何なにとかして確たしかな証あかし拠かを得た  
いため、一ひとつは里子に引寄ひきよせられたのです。里子は兎とも角かくも妹いです  
から、僕の結婚の不倫であることは言うまでもないが、僕は妹と  
して里子を考えることは如何どうしても出来ないのです。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫という言葉は愛と  
いう事実には勝かてないのです。僕と里子の愛あが却かえつて僕を苦しめ  
ると先程言いつたのは此この事です。

僕は里子を擁ようして泣なきました。幾度いくども泣なきました。僕も亦またた母  
と同じく物もの狂ぐるしくなりました、憐あわれなるは里子です。総すべての

事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑いに惑うばかり、遂には母と同じく怨霊を信ずるようになり、今も横浜の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨霊の本体を知らず、たゞ母も僕も此怨霊に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所天を救うとして居るのです。

僕は成るべく母を見ないようにして居ます。母も僕に遇うことを好みません。母の眼には成程僕が怨霊の顔と同じく見えるでしょうよ。僕は怨霊の児ですもの！

僕には母を母として愛さなければならん筈です、然し僕は母が僕の父を瀕死の際に捨て、僕を瀕死の父の病床に捨てて、密夫と走ったことを思うと、言うべからざる怨恨の情が起るのです。

僕の耳には亡父なきちちの怒罵どばの聲が聞こえるのです。僕の眼めには疲れはて果た身体からだを起して、何も知らない無心の子を擁いだき、男泣きに泣き給たまうた様が見えるのです。そして此この聲を聞き此様さまを見る僕には実に怨靈の氣が乗のり移うつるのです。

夕暮の空ほの暗い時に、柱むらに靠もたれて居いた僕が突然、眼まなこを張り呼吸きを凝こらして天の一方を睨にらむ様を見た者は母でなくとも逃げ出すでしょう。母ならば氣絶するでしょう。

けれども僕は里子のことを思うと、恨うらみも怒も消えて、たゞ限りなき悲哀かなしみに沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戦うて居るのです。

処ところが此九月このでした、僕は余りの苦惱くるしきに平常殆ど酒ほとん杯さかずきを手てにせ

ぬ僕が、里子の止るのも聴ず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然鎌倉から歸つて来て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は酔つて居ながらも直ぐ其理由の尋常でないことを悟つたのです。

一時間ばかり経つと里子は眼を泣き膨らして僕の居間に歸て来ましたから、『如何したのだ。』と聞くと里子は僕の傍に突伏して泣きだしました。

『母上おつかさんが僕を離婚すると云つたのだろう。』と僕は思わず怒鳴りました。すると里子は狼狽あわてて、

『だからね、母が何と言つても所天決あなたして気にしないで下さいな。氣きちがい狂だと思つて投擲うっちゃつて置いて下さいな、ね、後生ですから

』と泣声を振わして言いますから、『そういうことなら投擲うつつちやつて置く訳に行かない。』と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間ひまもなかったので僕に続いて部屋に入ったのです。僕は母の前に座るや、

『貴女あなたは私を離婚すると里子に言ったそうですが、其理由そのわけを聞きましよう。離婚するなら仕ても私は平気です。或あるは寧ろ私の望むむところで御座います。けれども理由わけを被仰おっしやい、是非そ其の理由を聞きましよう。』と酔よに任まかせて詰寄つめよりました。すると母は僕の劍幕の余り鋭いので喫驚びつくりして僕の顔を見て居いるばかり、一言も発はしませんでした。

『サア理由わけを聞きましよう。

怨おんり靈りようが私に乗移のりつて居るから氣

味が悪いというのでしよう。それは気味が悪いでしようよ。私は怨霊の児こですもの。』と言い放はなちました、見る／＼母の顔色は変り、物をも言わず部屋へやの外へ駈かけ出て了しまいました。

僕は其まゝ母の居間に寝て了つたのです。眼めが覚さめるや酒の酔も醒さめ、頭の上には里子が心配そうに僕の顔を見て坐すわつて居ました。母は直すぐ鎌倉に引返したのでした。

其後そのご僕と母とは会わないのです。僕は母に交かわつて此方こちらに来て、母は今、横浜の宅に居ますが、里子は両方を交かわる／＼介抱して、ふたり二人の不幸をば一人ひとりで正直まことに解釈くわし、たゞ／＼怨おんり霊りようの業わざのみ信じて、二人の胸うちの中の真まの苦くる悩しを全然まるきり知らないのです。

僕は酒を飲むことを里子からも医師からも禁じられて居ます。

けれども如何どうでしょう。此このような目に遇あつて居る僕がブランデーの隠かくし飲みをやるのは、果はたして無理でしょうか。

今や僕の力は全く悪運の鬼に挫ひしがれて了いました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意い久く地じのないものと成り果はてて居るのです。如何どうでしょう、以上ザツと話しました僕の今日までの生涯の経

過を考がえて見て、僕の心持になつて貫もらいたいものです。これが唯ただ原因結果の理法に過すぎないと数学の式に對するような冷かな心持で居いられるものでしょうか。生うみの母は父の仇あだです、最愛の妻は兄きょうだい妹いです。これが冷かなる事実です。そして僕の運命です。

若もし此この運命から僕を救い得る人があるなら、僕は謹つつしんで教おしえを奉じます。其その人は僕の救すくいぬし主しゅです。」

## 七

自分は一言を交えないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫く  
は一言も発し得なかつた。成程悲惨なる境遇に陥つた人であると  
ツク／＼の毒に思つたのである。けれども止むなくんばと、  
「断然離婚なさつたら如何です。」

「それは新らしき事実を作るばかりです。既に在る事實は其為めに消えませんが。」

「けれども其は止を得ないでしょう。」

「だから運命です。離婚した処で生の母が父の仇である事實は消

ません。離婚した処ところで妹を妻として愛する僕の愛は変わりません。人の力を以て過去もつの事実を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱のがるゝことは出来ないでしょう。」

自分は握手して、黙礼して、此不幸このなる青年紳士と別れた、日は既に落ちて余光華ゆうべかに夕の雲を染め、願れば我運命論者は淋さびしき砂山の頂に立って沖を遙はるかに眺て居た。

其後その自分は此男あわに遇あわないのである。



## 青空文庫情報

底本：「日本の文学」 武蔵野・春の鳥」ほるぷ出版

1985（昭和60）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「運命」左久良書房

1906（明治39）年3月18日発行

「國木田獨歩全集 第三卷」学習研究社

1964（昭和39）年10月30日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※疑問点の確認にあたっては、「國木田獨歩全集 第三卷」1964

(昭和39)年10月30日発行を参照しました。

入力：Mt.fuji

校正：福地博文

1999年5月13日公開

2004年6月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 運命論者

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>